

## 山口益先生を偲ぶ



## 略歴

明治二十八年一月二十七日京都市に生まれる

大正七年六月 真宗大谷大学専修科卒業

大正十一年三月 真宗大谷大学研究科卒業

大正十三年四月 大谷大学助教授に就任

昭和二年二月 印度哲学仏教学研究のためフランスに留学（二年八月）

昭和九年四月 大谷大学教授に就任

昭和十年三月 京都帝国大学文学部講師を嘱託せらる

昭和十八年六月 文学博士の学位を授与せらる（京都帝国大学）

昭和二十三年十二月 第一回日本学術会議第一部会員に当選

昭和二十五年十二月 大谷大学長兼大谷大学教授に就任

昭和三十二年九月 フランス・アジア学会名誉会員に推挙せらる

昭和三十七年四月 大谷大学西蔵大蔵経勘同目錄編纂所長に就任

昭和三十七年十一月 紫綬褒章を授与せらる

昭和三十八年一月 学術奨励審議会委員を委嘱せらる（文部省）

昭和三十九年四月 大谷大学名誉教授に任ぜらる

昭和三十九年十一月 文北功労者として顕彰せらる

昭和四十年十一月 日本学士院会員に選ばる

昭和四十二年十一月 勲二等旭日重光章を授与せらる

昭和五十二年十月二十一日九時四十二分逝去。

法名、願照寺釈円実。

## 山口益先生を偲ぶ

佐々木教悟

山口先生が昨年十月二十一日にお亡くなりになってからすでに四カ月余りが経過してしまつた。時日が経過すればするほど、先生の遺された偉大な足跡が今更のごとおもわれる今日このごろである。

先生の歩まれた学歴については、去る昭和四十七年二月に春秋社より刊行された「山口益仏教学文集上」の「はしがき」に自らの筆で、その大筋をしるしておられるが、その文章からうかがわれることは、先生在学当時の大谷大学にあつては、学長に南条文雄博士をいただき、真宗学に住田智見、仏教学に俱舎の舟橋水哉、唯識の豊満春洞、華嚴の河野法雲、天台の上杉文秀などの諸碩学がおられ、さらに仏教学以外の哲学、社会学、史学その他には西田幾多郎、朝永三十郎、米田庄太郎、羽田亨、松本文三郎、坂口昇、榊亮三郎など京都大学の錚錚たる諸先生方が来講されていて、「まことに緊張した雰囲気の学園」であつたということである。このような学問をする場としてふさわしい雰囲気の中で、インドの仏教というものをひかれて梵語やチベット語の文献を学び始めておられた先生に将来を決定するほどの重要な機会が訪づれた。それは、一つはチベット大蔵経との出会いであり、他

はソルボンヌ大学のシルヴァン・レヴィ教授（一八六二—一九三五）との出会いである。

「殊に図書館書庫の三階に蔵せられてあつた北京版チベット大蔵経の偉観に心は掻き立てられて、インド仏教聖典の梵藏漢諸本の対照研究ということに志向するようになった。」ということは、そのことをよくもの語っている。そして先生に對してもっと大きな影響を与えることになった善き師が現われた。「自分自身の研究課題としては、恩師佐々木月樵先生の慫慂せられるところに従つて、Prasannapada 中論釈を中心として、チベット蔵経に収まる中観関係の諸釈疏を読解することに努め」ることに向かわれたのであつた。このようにして遂行された先生の研究業績のほとんどはチベット仏典と関係しないものはないといったものとなり、さらにまた、その学問的分野は、学界において未だ全く手につけられていない未開拓の領野であり、それを開拓されることになつたのである。

つぎにシルヴァン・レヴィ教授との出会いについては、榊博士が京都大学においてシルヴァン・レヴィ校訂出版の大乗莊嚴經論を講読された際に、その講席に列せられたのが最初であるが、そのときに梵文とチベット訳仏典とを対照して読解する方法を身につけられたといわれている。もちろん、レヴィ教授との実際の出会いは、先生がフランスに留学されたときである。先生はその留学中（昭和二年三月—昭和四年九月）大部分の期間を、そのころギユイメイ東洋博物館の副館長をしておられたルネ・グルッセ氏の家庭において過ごされたのであつた。グルッセ氏一家の篤い友

情に恵まれ、また同家に集まる日本美術愛好者をはじめ東洋学関係の諸学者との交際の中で、先生の世界に対する眼は開かれたのであった。先生は識見の狭い、たんなる仏教学者ではなかったのである。そのことは、「新ヒューマニズム」(弘文堂刊アテネ文庫94)の先生の跋文「ルネ・グルッセについて」を読めば、一目瞭然であり、ユネスコ運動に対する世界的な立場よりする一つの識見を示しておられることから充分にうかがうことができる。この点については、さらにまた、先生が「アポロン仏 Le Buddha apollinien」の著作や、レヴィ教授の *L'Inde Civilisatrice* の和訳(インド文北史なる名で出版)に非常な熱意を示されたことがもの語っている。

グルッセ家の応接室とおもわれるところで写された一葉の写真を見ると、レヴィ教授を囲んでベリオ、グルッセ、オーダン、武藤史、岡本貫璧、友松円諦、弓削達勝、浅野研真等の諸氏にまじって、紅顔にしていとも精悍な風貌の若き日の先生の姿が見られる。もって当時のフランス東洋学翰林院の雰囲気を感じることができるようである。なおここで一言しておきたいことは、ベルギーのガン大学の教授であったL・ドゥ・ラ・ヴァレー・ブーサン氏(一八六九—一九三七)と先生との関係である。先生がブーサン教授の講席に列せられたのは短期間のものであるが、「而も教授の学績によって啓発せられ、それに親しんだ因縁はまことに浅からざるものがあるのである。」(ド・ラ・ヴァレー・ブーサン教授業績の一斑を憶ふ)仏教研究二の三、昭和十三年)と述懐されているように、生前中つねにブーサン教授の業績なかならず俱舎

論のフランス語訳を嘆賞しておられたのを憶いだすのである。先生の精緻な学風の大半はブーサン教授から承けておられるといっても過言ではなからう。そして教授の学風に対する全幅の共鳴は、したがってまた教授の高弟で、かの智度論のフランス訳(第四冊まで出版)やインド仏教史(クシャーナ時代まで)などの大著で知られている現ル・ヴァン大学のエティエンヌ・ラモート教授とのあいだの学問上における親交をもたらししたのであった。

さて山口先生のご生涯における数多くの研究業績を一覧するに、はばつぎのようにまとめることができる。すなわち、大谷大学の学長に就任された昭和二十五年(一九五〇年)のころを境として、それ以前にあっては、主として中観・唯識系の大乗諸論について、その紹介、翻訳、論述による文献学的研究が多いが、それ以後においては、これまでの文献そのものの推究中心から、主として文献の包蔵する思想内容を思想史の上で位置づけ、正確にそれを把握しようとする方向に向けられていったといつてよからう。前者における代表的なものは、「中辺分別論」に関する三部作をはじめ、「仏教における無と有との対論」、「中観仏教論攷」、「月称造中論釈」I、IIなどである。このかんに終戦前後のきわめて困難な時期がふくまれており、門下生が次から次へと応召してほとんどいなくなるなかを、篤い信仰と学問に対する情熱とをたよりにして、独り黙然として研究に精進されたのであった。戦場におもむく門下生をあたたかい眼差(まなざし)で見送られた先生の姿を想いだすことのできる人は多くあることであろう。

後者における代表的なものは、「般若思想史」をはじめ、「大

乗としての浄土」、「仏教思想入門」などであり、さらに「世親の成業論」、「世親の浄土論」など、世親に集中していることが注目される。これらは「世親唯識の原典解明」(野沢静証氏と共著)を研究の基礎として、大乘の菩薩道を思想史の上であとづけようところをみたユニークな研究にもとづく成果である。そしてそれはやがて「大乘の仏道体系」(「仏教学序説」第四章)として結実することになった。横超、安藤、舟橋の三教授と共著というかたちで刊行された「仏教学序説」ならびに、晩年に力を注がれたところの「仏教聖典」の編集は、諸学者の協力によって、正法を現代に知らせ、後世にのこすという事業の成果であり、いわば *samgrhi* (結集) の現代版ともいえるべきものであろう。

先生は、昭和四十二年五月の日本学士院の例会で「チベット仏典について」(日本学士院紀要第二十五卷第二号所載)を、同じく四十四年二月の例会で「浄土について」(同紀要第二十七卷第二号所載)を発表しておられるが、この二つの論文は、上巻のべたところからも知られるごとく、先生のご生涯における研究の集約ともいべきものである。すなわち、一は仏教が大乘仏教として歴史的に実践せられる上から見て、チベット大蔵経の具有する意味を論じたものであり、他は無量寿経の説法として、浄土の功德が歴史の上に証明せられた点を大乘の仏道体系ということばで論じたものである。わたくしはここに親鸞教徒としての先生の面目躍如たるものがあることを知るのであるが、日本学士院という公の場において自己の蘊蓄を傾けて発表することができたことは、先生にとって本望でなかったかとおもわれる。このことは、

もとより先生の優れた資質と不屈の精進のためのものであるが、また最初にあげたような二つの出会いを可能ならしめたところの学問の府なる大谷大学の存在することを想わずにはいられない。

先生は大谷大学第十五代の学長として、二期八年間(昭和二十五年—三十二年)在職されたが、学長としての先生は、当然のことながら、清沢満之先生によって掲げられた大谷大学独自の教育理想を、佐々木月樵先生における「大谷大学樹立の精神」にもとづいて敷演されたのであった。「大谷大学のゆきかた」(大谷大学時報・昭和二十六年)をはじめ、大谷大学存立の意義(大谷大学時報第三号・昭和二十七年)、「大谷大学の理念」(大谷大学時報第五号・昭和二十八年)、「教学の実践体系としての大谷大学」(文化と伝統第一号・昭和三十年)、「教団の危機と仏教の新生面」(文化と伝統第二号・昭和三十一年)、「伝統への反省」(智慧の批判・昭和三十三年)など多くの講演があるが、どれをみても深い学識をもとにして、世界的な視野から大谷大学存立の意義をのべられたものであり、そこには大学のありかたについての厳しい反省と仏教的実践の真の意味を強調したもののばかりであるといつてよからう。

最後に、先生は真宗大谷派の一末寺の住職として法務を大切にされた方であるということを付言しておきたい。学問に専注することと法務に従事することを両立させることはなかなか容易なことではないが、先生はそれをもののみごとくにやりとげられたのであった。盂蘭盆会や彼岸会、ないし報恩講などに際して、門信徒に配布する案内状のガリ版を切っておられたお姿を今もお懐し

く想いだすのである。その折々の法話は十数冊のパンフレットとして刊行されているが、どこにそのようなエネルギーが蔵されていたのか不思議でならない。ともあれ、「願照寺圓實」なる法名が語ることく、大谷大学が産んだ世界的な仏教学者は、願照寺の住職としてのつとめをも果たして、八十一才を一期として円寂せられたのである。親鸞聖人八十三才のときの作といわれる「愚禿鈔上」に、本願一乗を示して「圓の中の圓なり、一乗一實は大誓願海なり」とあるが、先生の晩年のご心境のほどがうかがわれるようである。

(昭和五十二年三月十日しるす)

## 山口益博士著作目録

### 単行書

西蔵訳 唯識二十頌論、唯識二十頌論注記 佐々木月樵著「唯識二十論の対訳研究」所収 京都 内外出版株式会社 大正一二・一二

西蔵訳 撰大乘論 佐々木月樵著「漢訳四本対照 撰大乘論」所収 東京 朋文社 昭和六・一

*Stīramati, Madhyāntarabhāgavā, Exposition systématique du Yogācāra vijñaptiśāda. Edition d'après un manuscrit rapporté du Népal par M. Sylvain Lévi. Tome I-Texte, 4+IV+IV+XXVI+227p. Nagoya : Librairie Hajinkaku, 1934.*

和訳 称友俱舍論疏(一) 荻原雲来・山口益訳註 東京 大正大

学内梵文俱舍論疏刊行会 昭和九・九

安慧阿遮梨耶造・中辺分別論釈疏 訳註 名古屋 破塵閣 昭和一〇・一二

藏漢対照 弁中辺論 附中辺分別論釈疏梵文索引 名古屋 破塵閣 昭和一二・三

和訳 称友俱舍論疏(二) 荻原雲来・山口益訳註 東京 大正大

学内梵文俱舍論疏刊行会 昭和一四・九

仏教に於ける無と有との対論——中観心論入瑜伽行真実決択章の研究—— 東京・京都 弘文堂 昭和一六・六

梵本・西蔵本に依る国訳廻諍論 京都 真宗大谷派安居事務所

昭和一九・七 騰亨

中観仏教論攷 東京・京都 弘文堂 昭和一九・七

浄明句論と名づくる月称造中論釈Ⅰ 和訳〔第一、二章〕

東京・京都 弘文堂 昭和二二・一一

空の世界―大乘經典の宗教的性格― 東京 理想社 昭和二三・七

浄明句論と名づくる月称造中論釈Ⅱ 和訳〔第三―十一章〕

東京・京都 弘文堂 昭和二四・七

般若思想史 京都 法蔵館 昭和二六・三

世親の成業論―善慧戒の註釈による原典的解明― 京都 法蔵館 昭和二六・一二

動仏と静仏―仏教に於ける実践の体系― 東京 理想社 昭和二七・五

世親唯識の原典解明 山口益 野沢静證共著 京都 法蔵館

昭和二八・九 「唯識三十頌の原典解釈」の部分は野沢静證担当

フランス仏教学の五十年 京都 平楽寺書店 昭和二九・一一

心清浄の道 東京 理想社 昭和三〇・六、一五

俱舍論の原典解明 世間品 山口益・舟橋一哉共著 京都 法蔵館 昭和三〇・一一

親鸞聖人七百年御遠忌御待ち受けのころ―願照寺檀信徒・有縁

の方々へ― 京都 願照寺 昭和三一・七

智慧のすがた 京都 法蔵館 昭和三一・一〇

人道主義の愛と無我の慈悲―歎異抄の第四章について― 京都

願照寺 昭和三一・九

インド文化史 S・レヴィ著、山口益・佐々木教悟訳註 京都

平楽寺書店 昭和二三・五

アボロン仏 東京 理想社 昭和二三・八

Dynamic Buddha and Static Buddha 渡辺照宏訳 東京

理想社 昭和二三・八

智慧の批判 仏教思想研究会 昭和二三・九

生の宗教と死の宗教 京都 文栄堂 昭和三五・一〇

仏教学序説 山口益・横超慧日・安藤俊雄・舟橋一哉共著 京

都 平楽寺書店 昭和三六・五

仏陀における大乘としての宗教性 京都 百華苑 昭和三七・九

九

花は散る 京都 文栄堂 昭和三七・一〇

世親の浄土論 京都 法蔵館 昭和三七・七

大乘としての浄土 東京 理想社 昭和三八・九

すべてがいかされる心 京都 文栄堂 昭和三八・一〇

人間の宗教性 京都 文栄堂 昭和三九・一〇

仏教学のはなし 京都 平楽寺書店 昭和四〇・一〇

日本人の内に流れているもの 京都 文栄堂 昭和四〇・一〇

親鸞聖人の念仏生活 京都 文栄堂 昭和四一・一〇

空の世界 東京 理想社 昭和四二・五

仏教思想入門 東京 理想社 昭和四三・二

明治直前の時期以後における願照寺の沿革―十四世住職の百回忌

・十五世三十三回忌に述べた筆録― 京都 願照寺 昭和四

三・四

知進守退 京都 文栄堂 昭和四三・一〇

人間の仏教 京都 文栄堂 昭和四四・五

文化の活路としての仏教 京都 文栄堂 昭和四四・一〇

泥沼の夜明 京都 文栄堂 昭和四五・一〇

現世論と仏教 京都 文栄堂 昭和四六・一〇

山口益仏教学文集 上 東京 春秋社 昭和四七・二

遠慶宿縁 京都 文栄堂 昭和四七・一〇

山口益仏教学文集 下 東京 春秋社 昭和四八・五

仏教聖典 山口益編 京都 平楽寺書店 昭和四九・七

Index to the Prasannapadā Madhyamaka-vṛtti, part 1 & 2

京都 平楽寺書店 昭和四九

大乘仏典 浄土三部経 山口益・森三樹三郎・桜部建共訳 東

京 中央公論社 昭和五一・二

論 文

西蔵文 俱舎論破我品訳 寺本婉雅・山口益共訳 仏教研究

二卷一、二号 大正一〇・一、四

岡教遼氏訳梵文和訳法華経について 仏教研究 四卷二号 大

正一二・七

龍樹論師の七十空性偈 仏教研究 五卷一、三、四号、六卷一

号 大正一三・二―一四・二

龍樹の六十頌如理論について 仏教研究 七卷三号 大正一五

・一

正理学派に対する龍樹の論書 上、下 宗教研究 新四卷二、

三号 昭和二・三、五

エミール・スナールに遇ふ 大谷大学新聞 八四、八五号 昭

和三・四

漢蔵対照百字論及訳註 大谷学報 一一卷・二号 昭和五・五

安慧造中辺分別論註釈梵文写本の数葉について 大谷学報 一

一卷・三号 昭和五・九

「西蔵大蔵経甘殊爾勘同目錄」の発刊 大谷学報 一一卷・三

号 昭和五・九

安慧造中辺分別論註釈相品、虚妄分別相の梵本 大谷学報 一

二卷・一、二号 昭和六・一、三

世親造三性論偈の梵本及びその註釈的研究 宗教研究 新八卷

三、四号 昭和六・三、五

安慧造中辺分別論註釈相品、虚妄分別相の余及び空性の梵本

大谷学報 一二卷・四号 昭和六・一二

安慧造中辺分別論註釈障品第二の梵本 大谷学報 一三卷・一

号 昭和七・一

弥勒造「法法性分別論」管見 常盤博士還暦記念仏教論叢 昭

和八・七

根本中論疏無畏論訳註（池田澄達氏著）と中論偈の諸本対照研究

聖語研究 第一輯 昭和八・八

弁中辺論本文考 聖語研究 第二輯 昭和九・七

西蔵語の系統 岩波講座 東洋思潮所収 昭和一〇・一〇

故シルヴン・レギ教授業績の一端を偲ぶ 宗教研究 新一三卷

・一号 昭和一一・一

法法性分別論の梵文断片 大谷学報 一七卷・四号 昭和一一・三

智吉祥賢の入楞伽経註について 日本仏教学協会年報 第八年

昭和一一・四

月称造 四百論积疏の序について

和一一・五 仏教研究 一卷・一号 昭和

Nāgārjuna's Mahāyāna-viṃśaka, *Eastern Buddhist*, 1927

Dignāga; Examen de l'objet de la connaissance [Ālambana-parikṣā], Textes tibétain et chinois et traduction des stances et du commentaire, *Journal Asiatique*, 1929.

Traité de Nāgārjuna, pour écarter les voines discussions, *Journal Asiatique*, 1929.

聖提婆造四百観論に於ける説法百義の要項 日本仏教学協会年報 第十年 昭和一一・四

ブーサン教授業績の一斑を憶ふ 仏教研究 二卷・三号 昭和

一一・六

聖提婆に帰せられたる中観論書 大谷学報 一八卷・四号、一

九卷・一、四号

中観・瑜伽論證の歴史的意義について 哲学研究 二五卷・三号 昭和一一・三

号 昭和一一・三

中観派に於ける中観説の綱要書 大谷大学研究年報 第二輯

昭和一一・三

印度に於ける仏教破析の遠因 学芸 二卷 昭和一九・四

印度大乘教学史に於ける教相判釈の展開 大谷学報 二五卷・

一一二号(合併号) 昭和一九・一〇

華嚴経唯心偈の印度的訓詁 大谷学報 二八卷・三一四号 昭和

和二四・六

維摩経仏国品の原典的解釈 上、下 大谷学報 三〇卷・二、

四号 昭和二五・一、二六・二

唯識二十論の原典解釈 仏教学研究 三、四号 昭和二五・二、

一一

廻諍論について 密教文化 七号 昭和二四・六

廻諍論の註釈的研究 密教文化 八、九、一〇、一一号 昭和

二五・二、一一

ルネ・グルッセについて 新ヒューマニズム(アテネ文庫九四)

附録 昭和二五・三

最近十一年間のヨーロッパに於ける仏教研究 思想 三二、三三

昭和二五・七

ヨーロッパに於ける最近十一年間の仏教研究の業績―巴里大学マ

ルセル・ラルー女史の報告― 哲学雑誌 六六卷(七〇九号)

昭和二六・三

動仏と静仏 無碍道 二号 昭和二六・七

エティエンヌ・ラモート教授の大智度論のフランス訳 大谷大

学仏教学会々報 第五輯 昭和二七・二

仏教的一 福井大谷学場刊 昭和二八・六

伝統への反省―大谷大学開学記念式の式辞として― 真宗 昭和

昭和二八・六



和二九・一

文化と伝統 大谷大学時報 八号 昭和二九・二

フランスに於ける初期の「仏教チベツト学」をめぐるて 関西

大学学術研究所刊、東西学術研究所彙報 第四 昭和二九・三

フランスに於ける初期の仏教チベツト学について 日本西蔵学

会々報 一号 昭和二九・五

東洋宗教への反省 福井大谷学場刊 昭和二九・七

月称造四百論積疏破我の論理―対教論を中心として 宮本博士

還暦記念「印度学仏教学論集」 昭和二九・七

仏教思想の根本 現代仏教講座 第二巻 昭和三〇・三

聖典概説 現代仏教講座 第五巻 昭和三〇・八

教学の実践体系としての大谷大学 大谷大学刊 文化と伝統1

昭和三〇・三

教団の危機と仏教の新生面 大谷大学刊 文化と伝統2 昭和

三一・一〇

世親の釈論について―かりそめな解題というほどのもの―

日本仏教学会年報 二五号 昭和三四・一〇

アーラヤの転依としての清浄句 大谷学報 四〇巻二号 昭和

三五・九

中観仏教における有神論の批判 鈴木大拙博士頌寿記念会編

仏教と文化 昭和三五・一〇

ヨーロッパにおいて仏教の研究が進められてきたことなど 近

世仏教研究会刊 近世仏教―史料と研究 二巻一号 昭和三六

四百論破常品の要項―有・存在の限界― 大谷大学研究年報

一四集 昭和三七・三

大乘非仏説論に対する世親の論破―釈論第四章に対する一解題

― 東方学論集 創立十五周年記念号 昭和三七・七

仏道体系としての浄土 京都 永田文昌堂刊 浄土 昭和三八

・九

中観莊嚴論の解題序説 干潟博士古稀記念論文集 昭和三九・

六

月称造四百論註釈破常品の解説 鈴木学術財団研究年報1 昭

和四〇・三

大乘仏教について―その精神史観への一試攷― 仏教学セミナ

1 一号 昭和四〇・五

月称造五蘊論における慧の心所の解釈 金倉円照博士古稀記念

印度学仏教学論集 昭和四一・一〇

The Concept of the Pure land in Nagarjuna's Doctrine,

Eastern Buddhist, New Series, Vol. 1, No. 2 昭和四一・

一1

仏陀 信道 一二巻一二号 昭和四一・一二

大拙先生の学績についておもう 鈴木学術財団研究年報3 昭

和四二・三

チベツト仏典について 日本学士院紀要 二五巻二号 昭和四

二・五、仏教学セミナー 六号 昭和四二・一〇

仏教は人間形成をする 四天王寺 三三〇号 昭和四三・四

浄土について 日本学士院紀要 二七巻二号 昭和四四・二、

仏教学セミナー 一一号 昭和四五・五

チベット仏典における法華経―法華玄賛のチベット訳本について

― 金倉円照編 法華経の成立と展開 昭和四五・三

大谷高校第二十二回卒業式に参列して 大谷中高同窓会報 昭和四五・八

性相学についておもう 春秋 一三三号 昭和四七・四

仏身観の思想的展開 日本学士院紀要 三〇巻三号 昭和四七・一一

遠慶宿縁 教化研究 六八号 昭和四七・一二

無神論としての仏教の宗教性 真宗大谷育英財団肄学生山科寮

研究紀要 慧灯 二号 昭和四八・三

無神論としての仏教の宗教性 序説 教化研究 六九号 昭和四八・六

「如来」について―特に報身の意味に関して―

二号 昭和四九・三 教化研究 七

成業論の原典に対する一疑問 仏教学セミナー 二〇号 昭和四九・一〇

佐々木月樵先生についての憶い出の若干 大谷大学刊 大谷大

学樹立の精神 昭和五〇・三